

茶碗『厚白化粧』  
W14.5×H6cm  
[粘土] オリジナル  
ブレンド土+酸化  
鉄8% [白化粧] 蛙  
目土5、珪石5 [釉  
薬] 石灰透明釉+  
松灰釉10% [焼成]  
電気窯/酸化焼成/  
1220℃。



茶碗『玉子』  
W11.5W×H7.5cm  
[粘土] オリジナル  
ブレンド土+酸化  
鉄8% [白化粧] 蛙  
目土5 珪石5 [釉  
薬] 石灰透明釉+松  
灰釉10% [焼成] 電  
気窯/酸化焼成/



韓国・慶星大学名誉教授

# 李基柱の粉引



今年7月に『増穂登り窯』で開催された日韓交流ワークショップにて。左から2番目が李基柱氏。左端は現慶星大学学長の権相仁。

韓国・慶星大教授のワークショップ  
今年7月、増穂登り窯（山梨県富士川町）では、韓国・釜山の慶星大学美術大学から李基柱名誉教授と権相仁学長を招き、陶芸ワークショップを行った。アマチュア陶芸家たちが教授から技法を学びながらオブジェを制作。政治問題で日韓関係が悪化する中、陶芸を通して文化交流を図った。  
増穂登り窯と同大は、2010年2月に山梨県立美術館で開催された日韓交流エコアート展に両氏が出展したことをきっかけに交流が始まった。その後も両



# 胎土

基本は3種類をブレンド。  
後から酸化鉄3〜4%足すことも

## 基本原料

- ① 甕土……………1
- ② ピンクカオリン……………1
- ③ 生草土……………1

写真左／粉引の基本原料3種類をブレンドした土。  
写真右／基本原料に酸化鉄を3〜4%加えたもの



素粘土は甕土、ピンクカオリン、生草土の3種類をブレンド。甕土とはキムチを漬け込む専用品で鉄分が多く、耐火度は低い。ピンクカオリンは慶尚南道／山清郡産。生草土は白土系で耐火度は高い。これを基本に後から酸化鉄を3〜4%追加することもある。焼き締まると素地は茶褐色になる。



# 白化粧

化粧土Aはすつきりとした白さ  
化粧土Bはやわらかいクリーム色

## 化粧土Aの原料

- ① 朝鮮カオリン……………5
- ② 天草陶石水濾粉末……………2
- ③ 蛙目土……………3

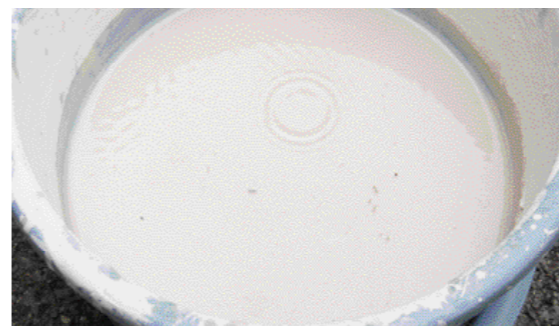


## 化粧土Bの原料

- ① 珪石……………5
- ② 蛙目土……………5



化粧土A  
10ℓの水を入れて浸透させる。フルイに1回掛ける。



化粧土B。  
10ℓの水を入れて浸透させる。フルイに1回掛ける。

[素地を水に浸した後、部分的にムラ掛けし、火間を現す]



[素地を水に浸してからズブ掛け。白化粧の濃淡を表現]



[素焼きした素地をズブ掛け。高台の中まで総掛け]



[素焼きした素地をムラ掛け。白化粧の濃淡を表現]



做はあまり良しとされず、むしろ作家としては恥ずかしい行為である、と言われ驚いた。  
日本においては、古来より中国陶磁や高麗茶碗などの朝鮮陶磁の写しは、複製品を作るという意味ではなく、それらを本歌取とした日本的な創作という意味合いが強い。  
しかし、韓国の陶芸家からすれば、日本向けの朝鮮古陶磁のコピーを作っているという意識があるのだろう。李氏としては、高麗青磁も李朝白磁も意識していても、表現としては現代の陶芸を意識している。だから茶碗の成形後に「掻き落し」という伝統技法を、単に器面に変化を持たせるためだけの装飾技法として使うのではなく、力強い造形意識を持って作っている。

## 火間を現す化粧掛け

高台を3本指で掴み、一度、素地を水に浸す。茶碗を横にしたまま化粧土の中に半分だけ沈める。反対側も同じ要領、部分的に素地が見えてもOK。あえて掛け残して素地を見せる。これを「火間」という。素地が水を吸っているの、必要以上に化粧土をも載らない。厚掛けになりにくい。





碗の内側。真上から見た状態。



高台

化粧土A使用(朝鮮カオリン5+天草陶石2+蛙目土3)  
茶碗 [寸法] 口径15.5×高さ6.5cm [粘土] 白土 [焼成] 増穂登り窯(桐木間 最前列 左最上段) 1230℃ 96時間(宇田川嵩雪 作)



化粧土A使用(朝鮮カオリン5+天草陶石2+蛙目土3)  
茶碗 [寸法] 口径14.5×高さ7.5cm [粘土] 白土 [焼成] 増穂登り窯(桐木間 最前列 左中段) 1230℃ 96時間(宇田川嵩雪 作)



化粧土A使用(朝鮮カオリン5+天草陶石2+蛙目土3)  
茶碗 [寸法] 口径16×高さ8cm [粘土] 白土 [焼成] 増穂登り窯(桐木間 2列目) 1230℃ 96時間(宇田川嵩雪 作)



化粧土B使用(珪石5+蛙目土5)  
湯呑 [寸法] 口径7×高さ6cm [粘土] 赤土 [焼成] 増穂登り窯(桐木間 最前列 最上段) 1230℃ 96時間(太田治孝 作)



化粧土A使用(朝鮮カオリン5+天草陶石2+蛙目土3)  
茶碗 [寸法] 口径16×高さ7cm [粘土] 白土 [焼成] 増穂登り窯(桐木間 最前列 左最上段) 1230℃ 96時間(宇田川嵩雪 作)



[茶碗の形状] 筒形 [寸法] 口径14×高さ10cm 高台径5cm [重量] 600g



[茶碗の形状] 朝顔形 [寸法] 口径18×高さ9cm 高台径3.8cm [重量] 700g



[茶碗の形状] 鎚文筒形 [寸法] 口径13×高さ11cm 高台径5.3cm [重量] 700g

### 茶碗を挽く

見込みから内側の壁カーブに沿ってへらで滑らせる。底の中心を人差し指で押さえ見込みを作る。



### 高台を削る

高台の外側のアタリから腰までをカキベラで直線的に削り込む。高台内側の輪郭をカキベラの角で削り、形を整える。



化粧掛けについても火間や指跡をつけたり息を吹き掛けるなど、「文様」というより「絵画」として器面で踊っている。そうした作品の中から、35ページにある牛のような動物の作品がイメージされたのかもしれない。

### 剛胆に削る

一方で、ロクロで挽いた作品の高台削りは、高台および腰部にかけて、やや剛胆な姿に削っていく。カキベラを両手でぎゅっと押さえ、膝の上で固定し極力ブレを防ぐ。口縁回りは比較的すつきりとした円形のまま調整することによって、互いにそれが強調された調和を見せている。やや凹凸や手触りに変化があるものの、その方が持ちやすく、手触りそのものも楽しめる。